

報部

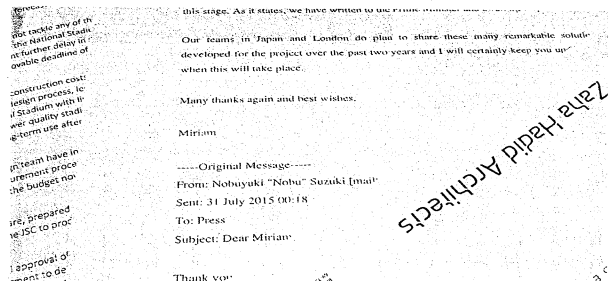
FAX 03 (3595) 6911 Eメール tokuho@chunichi.co.jp

「新国立」計画白紙

「工費高騰デザイン要因ではない」

ハデイド氏反論

ハデイド氏の事務所から「こちら特報部」に届いたメール(中央)と同氏の声明



Zaha Hadid Architects

新国立競技場の建設計画問題で、旧デザインを担当した英国在住の建築家ザハ・ハデイド氏の事務所が「工費高騰はデザインではなく、競争がない建築会社の選定などが原因」とする声明を発表し、旧計画の白紙撤回に不満を示している。同事務所は事業主体の日本スポーツ振興センター(JSC)を批判するとともに、低コストの見直し案の作成も進めている。問題はまだまだ尾を引きそうだ。(鈴木伸幸)

「ハデイド案について経緯を正しく把握する必要がある」との一文で始まる声明はA4用紙二枚にわたる、びっしりと書き込まれている。ハデイド氏側の言いは次の通りだ。新競技場の工費高騰は、ハデイド氏側も当初から懸念していた。JSCに対しては「完成期日を決めず、しかも予算を見積もらせず、建設会社を選ぶことは危険」と忠告していた。なぜなら過去の経験から「国際競争がなく、早い段階で限られた国内業者から建設会社を選べば、十分な価格競争はなく、建設費が上がり上げられる」と考えたからだ。ハデイド氏側には低コストの代替案があり、デザインやスタジアムの材

「価格競争ない」JSCに忠告届かず

質の変更などについて提案した。「建設会社とチームを組んで作業したい」とも伝えたが、ほとんどが聞き入れてもらえなかった。白紙撤回につながった今年七月のJSCの報告書で、建設会社が提示した金額を基に「工費高騰の原因はデザイン」とされたことにも反発した。アーチ構造については「複雑ではない。基本的な橋を建築する技術」と解説。アーチ構造に掛かる費用は二百三十億円で、白紙撤回の直前に承認された工費二千五百二十億円の一分以下と指摘した。ハデイド氏のデザインは二〇一二年十一月に選ばれた。翌一三年九月に東京五輪の開催が決まって以来、ハデイド氏側は二年間にわたり節目ごとにJSCの承認を受けながら建設計画に関わってきた。工費高騰を懸念していたにもかかわらず、最後にはしごを外され



ザハ・ハデイド氏

格好だ。JSCには抗議を申し入れた。東京の建築需要の増加や円安による資材高騰で工費が膨らんだことは認めつつ、「ゼロから見直せば、工期も遅れ、さらに工費は高騰する」「これまでの経験からコスト効率の高い見直し案を数週間後に公開する」としている。その旨の文書を安倍晋三首相にも送付したという。

JSCによると、ハデイド氏の事務所とは、デザイン監修料として本年度までに計十四億七千万円の契約を結んでいる。契約解除による違約金はないという。だが、ハデイド氏は「建築家のノーベル賞」ともいわれるプリツカー賞受賞の人物。名誉毀損などで損害賠償を請求する可能性もある。「こちら特報部」が同氏の事務所に関わり合せてきたところ、「現時点では、安倍首相からの返答を待っている段階」とメールで回答。法的措置を否定はしなかった。

新国立競技場の建設計画問題に詳しい建築エコノミストの森山高至氏は、ハデイド氏の胸中について「ハデイド氏は契約解除そのものより、途中の過程でコスト削減策を提案したのに受け入れられず、最後に『デザインで工費高騰』とされたことを問題視している」と推し量る。

一方、JSCの対応には「契約解除にもやり方があり、この期に及んでも当事者能力を欠いている」と首をかしげる。

「ハデイド氏はこうした駆け引きでは百戦錬磨。きちんと対応しないと問題はこじれる。公共事業で工費が当初予算の何倍にも膨れ上がることはよくある。この際、徹底的な情報公開で問題を検証してほしい」